

の運命となった。実に八十余年にわたる最長の医事雑誌として、後世にその名を刻まれた。

本書は十章からなり、前半は雄寧の生涯を区分して資料を交えて記述され、後半は日本医事新誌の刊行事情、太田家の系譜、雄寧の著書などについて記述されている。本書を一読し、筆者なりに関心を深めた一、二について述べると、著者が雄寧の米国留学中(明治六年)の肖像入り絵葉書を所持されていることであり、ぜひ機会をみて拝見したいと思つている。また、創刊号の表紙には「黒十字」がデザインされており、雄寧は赤十字のシンボルマークを米国留学中に知つて活用したものと推論されている。筆者は以前より日本における赤十字マークの使用由来につき関心があり、検索の結果明治五年十一月発行の京都療病院新聞第一号に病院旗に黒十字を使用する記述を知つており、日本医事新誌の表紙デザインとともに覚書として留めておきたい。また、本書に収載されている写真に松本良順と蘭疇舎の塾生、松本良順の還暦祝賀会と日本医学界の指導者達、太田雄寧の小照があり、いずれも大変鮮明で著者の許可を得て活用されうる貴重な資料である。

雄寧は短い生涯であつたが、多数の著書を遺している。薬物鑑法(明治八年)、新訂各国薬量一覽、独米局方一覽、原素一覽、袖珍分量考、薬舖心得草、温泉論、新式化学、看護心得、民間四季養生心得、獸類薬物学及獸類薬法書、薬物学大意、儒門医学などで米国留学の目的が窺われる。

本書は東京医事新誌の創刊事情を知る上で極めて貴重な伝記である。私家版の非売品であり、著者の好意に甘えて寄贈をお願いして一読されることを薦める。

(寺畑 喜朔)

〔雄寧会、東京都板橋区常盤台四一三二一二、電話〇三一九三七一九九三五、平成十五年八月三十一日、A五判、一五八頁、非売品〕

梶田 昭 著

### 『医学の歴史』

二〇〇三年秋に講談社学術文庫の一冊として世に出た(奥付での刊行日は九月一〇日)この注目すべき著作について、著者自身は何も語ることができない。それどころか、みずからは〈序文〉も〈あとがき〉も書くことが叶わなかった。

これらに代わって、いま私たちが手にする本の巻頭には順天堂大学・医史学の酒井シツ教授の〈推薦のことば〉(以下では仮に①と呼ばせて頂く)が、巻末にはさらに東京医科歯科大学教養部の佐々木武教授の〈解説にかえてー思想史研究者の立場から〉という文章(以下では仮に②)と、東京医科歯科大学医学部長で病理学の広川勝彦教授の〈あとがき〉(以下では仮に③)が加わっている。①と③は〇三年七月という日付を持っているが、これら三つの文章はこの著作の成立につ

いて、いろいろな事情を語っている。

まず①は、本書が編集者のいろいろな注文に応じて執筆されたと述べている。

実際の執筆は②によれば、一九九九年秋に始められ、翌二〇〇〇年の終わりに「ひとまず脱稿、入稿することなく年を越し、二〇〇一年一月七日〔胸部〕大動脈瘤破裂で即死に近い状況で死去」となっている。

倒叙になるが、同じく②によれば、この大動脈瘤は一九九八年に地域の健康診断で発見され、「再度確認のうえ、特別に対症することなく」執筆に至ったものである。著者は一九二二年生まれとなっているから、発見は七六歳ごろ、執筆開始は七七歳ごろとなろう。

ところで、いつごろからかは不明だが、③によれば著者夫妻は、日本女子大学の佐藤和人教授のリウマチ・痛風外来に行っていた由で、著者没後に夫人が解説者を求めて初校ゲラを持って相談に見えた、という。佐藤教授がゲラを若年時著者のもとで教室員でもあった③の広川教授のもとに届けたという次第のようである。

そして一読その面白さに驚くとともに、推敲前の状態と断じて、「この方面に詳しい人」として校閲を委ねられたのが②の佐々木教授で、「最小限の加筆・訂正を始め」て半年近くも手もとに置いたが、時間切れで再校に回され、「これ以上の加筆・訂正は断念して、ここに『解説』めいたものを書くことになった」としている。

「著者自身の『歴史』とその『医学史』がどこかで重なっているとか思えぬ」という考えで、未亡人から送られた資料に基づいて東京女子医大病理学教授就任までの著者前半生の細かい学歴・職歴を明らかにしているのが②の特徴で、その間の原爆被災地調査、引揚船乗組み、メーデー参加などにも触れている。

本書成立までの経緯の記述に思わず紙幅を費やしたが、その内容が興味深く、話題が縦横に飛び、博引旁証、奥が深い、などについては①②③がこもごも指摘するところである。

著者は一九七八年に女子医大を定年退職するのであるが、その後手がけた訳業に旧訳・新訳聖書の医学を扱ったものが私の記憶に新しく、ほかに民俗学や古代インドを主題にしたものもある。

こうした事実は医療の原初に近い姿からその本質に迫ろうとする著者の強い指向を反映したものと考えられる。本書全体の構成を見ても、ルネサンス以前に予想以上に多くのページが割かれているのはそうした事情にもよろう。

①の酒井教授は本書に索引がないのを惜しまれている。②の佐々木教授は「引用・参考書目リスト一覧」をつけられなかったのが残念至極とされた。ここで私は両教授のひそみに做う意味で、少しく私事に亘ることをお許し頂きたく思う。

私は先師・小川鼎三博士の「医学の歴史」を教科書にして、プリントとスライドで補いながら、年間三十時間、ほぼ十八年の間、ヴィジュアル世代の若者を相手に医学史の授業を行

った。同じく小著ながらこちらは七十枚ばかりの図版を持っている。しかし、例えば前野良沢やコッホの肖像はあっても杉田玄白やパストールのそれはない。自作スライドで補った所のだが、これからの若い読者にぜひ推奨したい梶田昭博士の遺著となった本書も、もし図版をつけて預けたならば、どんなに魅力が増しただろうか。詮ないことながらそう惜しいかと思いを、どうしても禁じ得なかったのである。

(三輪 卓爾)

〔講談社、東京都文京区音羽二―二―二、電話〇三―五三九五―三六二五、文庫判、三六〇頁、一二〇〇円〕

瀧澤 利行 著

### 『養生論の思想』

国民の健康づくり運動の根拠となる「健康増進法」が二〇〇二年八月に公布され、疾病予防と健康の維持・増進に向けた動きが現在、加速されている。同法は、これまでの事後処理的な医療対応が国民医療費を押し上げてきたという反省にもとづき、予防的介入を強化してゆこうというものである。

しかし、健康づくり運動も数値目標を掲げて半ば強制的なものになると、恐れにも似た感情が生まれる。というのは、劣等生であった私は中学や高校生のころ、教科担任から「何点以下だと通信簿に赤座ぶとんが付くぞ」と、よく脅され、

「赤点の者は居残れ」とか、答案返却の際に、「新村はダメな奴だ」などと皆の前で言われ、恥をかかされるペナルティを受けていたからである。

今度の国民健康づくり運動においても、健康度を示す数値目標に到れなかった者たちには、きつとペナルティが用意されることになるであろう。不到達の者、それは自己責任能力の欠落者であり、自助努力に対する怠慢という罪を犯した者と認識され、ペナルティとして保険診療の制限が用意されるのではない。すなわち、欠落度や怠慢度に応じて自己負担(自費診療)を課すという仕組みの導入である。そして、さらに……と考えるゆくと、この本の紹介からほとんど離れてゆくので止めるが、ともかくも現代は健康においても自己責任・自助努力が求められる時代となっているのである。この際、国が国民の健康を保障する義務などを負うことのなかった時代に、盛んにもはやされていた養生の教えなどを見直してみてはいかがであろうか。

そんな気持ちから本書を手にとってみたが、本書はその種の実践的な教え、健康に良さそうな美味しい話を集めたものではなかった。少し肩凝りしそうな、その意味では養生とは遠い、固くて奥の深い話の内容である。すなわち、『近代日本養生論・衛生論集成』の編者として知られる著者が、養生書を網羅的に閲読されたうえで、近世における養生思想の分類体系化をはかったものである。以下、章ごとに少し気の付いた点についてふれてみたい。